

集英社新書ノンフィクション

落語の人、

春風亭8一之輔

中村計

Nakamura Kei

目次

はじめに　　〜長い言い訳〜

7

一、ふてぶてしい人

37

前座時代の一之輔が放った衝撃の一言

不機嫌そうに出てきて、不機嫌そうにしゃべる

「自分の言葉に飽きたらダメなんです」

挫折がなさ過ぎる

一、壊す人

59

YouTube 著作権侵害事件

西の枝雀、東の一之輔

保守的な落語協会と、リベラルな落語芸術協会

「跡形もないな、おまえ」

師匠を「どうしちゃったの？」と驚かせた『初天神』

食わせてもらったネタ

たった一席の二十周年記念

逸脱が逸脱を生む「フリー落語」

一之輔の稽古は「うーん」しか言わない

同志、柳家喜多八

一、寄席の人

談志の弟子にならなかった理由

寄席への偏愛

寄席は落語家の最後の生息地

「捨て耳」という修行

劇っぽくなってきた落語

一、泣かせない人

人情漸に逃げるな

泣かせる側に落っこちてしまうことが怖い

泣く一メートル手前までいく人情漸

一朝は一之輔に嫉妬しないのか

おわりに　　く頼むぞ、一之輔く

はじめに　　～長い言い訳～

落語に少しでも関心を示した人に私ができる最善のこと。それは、そのとき、ひいきにしている私の個人的なベスト3の落語家の独演会に連れて行ってあげることだった。

何事も最初が肝心である。なので、どの落語家でも、なるべく一〇列目以内の席を確保できそうな落語会に絞った。落語家は言葉だけでなく、身振りや表情でも語る。それを感じ取って欲しかった。

チケットの確保には、もちろん労力がある。ただ、私は「今度、落語連れて行ってよ」と言ってくれた人には、何がなんでも教えてあげたかった。落語というユートピアの存在を。そして、共有しなかったのだ。世の中に落語家という人たちが住んでいることの幸福を。

私が落語に「落ちた」のは、社会人になって二年目のことだ。大学卒業と同時に勤め始めたスポーツ新聞社をわずか七カ月で辞めてしまった私は、実家に居づらくなったこともあり、翌

年春から池袋の家賃四万円のアパートで一人暮らしを始めた。

私はそこでフリーライターという、じつに頼りない呼び名の自営業者としての第一歩を踏み出した。

しばらくは下唇をかむような日々だった。とはいえ、まだ若く、独り身だったこともあり、稼ぎは少なかったが行く末をさほど案じていたわけでもない。ただ、夜道を一人で歩いていると、暗闇が重力をともなつて身体からだにのしかかってくるような感覚に襲われることがたびたびあった。

アパートは池袋駅西口から徒歩十分ほどのところにあつた。その道中、いつも気になつていたビルがある。

駅から一、二分も歩くと、繁華街に入つてすぐのところみかげいしに御影石の外壁に囲まれた比較的新しいビルが建つていた。一階に飾られた大きな幟のぼりと、壁面に立てかけられた看板の無数の江戸文字。決して大きいわけでもないそのビルは、池袋の街で完全に浮いていた。

ビルの二階部分から大きな袖看板が突き出っていて、蛍光灯の光の中に「池袋演芸場」という黒々とした江戸文字が浮かび上がっていた。

そこが主に落語を聴く場所だということまではわからなかった。ただ、これまで人生で一度

も通ったことのない世界がそこにあることだけは予想がついた。

ある日、何とはなしに、その世界に足を一步踏み入れた。おそらくは時間があって、たまたま好奇心が勝ったのだろう。

一階のチケット売り場で入場料を支払うと、右手のゲートから地下へと続く階段を降りていくよう促される。階段を降り切ったところでチケットを提示し、すぐ横にある防音扉を引いた。想像よりもはるかに狭い空間だった。小さな舞台と、少ない客席（九二席）。昼時ということもあつたのだろう、客は私を含めて四、五人しかいなかった。

ただ、その小さな空間は、異様な熱量に満ちていた。

ステージ上の座布団に座っている男との距離が、とにかく近い。息を呑んだときの喉の動きも、額の汗も、はつきりと見える。

そのときの落語家が誰だったのかも、どんな話をしていたのかも、まったく覚えていない。ただ、ガラガラの客席に向かって、着物姿の男が尋常とは思えないほどの大声を張り上げていた姿だけが鮮烈な記憶として残っているだけだ。あんなに近い距離で、あんなに大きな人の声を聞いたのは初めてのことだった。

それが私と落語の出会いだった。

大都會の小さな穴蔵で、落語家という奇妙な職業人を見つけたことに、無性に勇気づけられていた。

俺も生きていける——。

さしたる根拠もなく、そう樂觀的になれた。

私はそれからというもの足繁あししげく池袋演芸場に通うようになった。

落語らくごは笑わせてくれるもの。

一般的にはそんなイメージがあるかもしれないが、私は、そこはさほど求めていなかった。ゲラゲラと笑わせられたこともあったが、それよりも時折、クスリとさせられるくらいで十分だったし、そのくらいの方が心地よかった。それだけでも、終演後、池袋演芸場の地上へと続く階段を上っているとき、身体が軽くなっているのがはつきりとわかった。

凹へこんだ卓球の球を沸騰した湯に入れるととの球形に戻る。落語も似たようなところがあった。落語を聴くと、日常生活で気づかぬうちにダメージを負っていた精神の凹みへこが元通りになる感覚があった。

そんな経験をしてからというもの、落語に行けない日々が続くと、人間をサボっているような気分になったものだ。

池袋演芸場は、演芸の世界で「寄席」と呼ばれる場所だった。

三百六十五日営業していて、昼の部は十二時ごろ、夜の部は十七時前後にそれぞれ開演する。いずれも四時間程度の間、芸人たちが入れ替わり立ち替わり出てくる。ほとんど落語だが、合間合間に「色物」と呼ばれる紙切り、奇術、漫才といった演芸も組み込まれている。出演メンバーは十日ごとに変わる仕組みになっていて、一日から十日を「上席」、十一日から二十日を「中席」、二十一日から三十日を「下席」と呼ぶ。

このような寄席が都内には池袋演芸場を含めて四カ所ある。残りの三つは、鈴木演芸場（上野）、新宿末廣亭、浅草演芸ホールだ。一般の入場料はいずれも二五〇〇円から三〇〇〇円で原則、客の入れ替えはない。つまり、昼から夜まで通して八時間近く観続けることもできる。私はたいてい昼の部のトリが登場する少し前に入場し、そこから夜の部を通して鑑賞した。一日で二席、トリの高座を観られる「満腹コース」だ。

寄席に行くたびに一〇人以上の落語家を観ていると、落語の世界にもうまい人と下手な人がいることが自然とわかってくる。そうすると当然のことながら、うまい人の落語をもっと集中的に聴きたいという願望が頭をもたげてくる。私は次第に寄席で見つけたお気に入りの落語家

の独演会へ出かけるようになった。

私の落語鑑賞の頻度は多くても月に四、五回程度だった。となると、追いかけられる落語家は三人くらいが限界である。私は、その時々の中のベスト3を最優先し、落語会のチケットを予約した。

ベスト3の落語家は最初のころは、柳家小三治やなぎや こそんじ、古今亭志ん朝ここんていし ちよう、柳家権太楼ごんたろうだった。それが、ある時期には、立川志の輔たちかわし すけ、立川談春だんしゆん、柳家さん喬きまよになつたりした。どの落語家も人気、実力ともにピカイチの落語家たちである。

私は落語の世界のとば口に立った人のために、可能な範囲で、彼らの落語会のチケットを手配した。

彼らの落語会の一〇列目より前の席を二席確保するのは並大抵のことではない。ところが、そんな苦勞に反し、連れて行ってあげた人からはなかなか期待通りのリアクションを得られなかった。

落語家との相性もあるだろうし、その日の落語家の出来もあったのかもしれない。あるいは、落語という演芸自体が、その人に向いていなかったのかもしれない。仕方のないこととはいえ、最前席を押さえたときや、今も忘れられない名演に遭遇したときに喜んでもらえないと心底、

がっかりしたものだ。

今の自分に大なり小なり欠落感を抱いている人でないと落語は響かないのではないか。そんな風に考えたこともある。落語は何かを与えてくれるというよりは、欠損部分を埋めてくれる、じつにささやかなエンターテインメントなのかもしれない、と。

一人でも多くの人に落語の快楽を教えてあげたいと張り切っていた私は、次第にすっかりトーンダウンしてしまった。それまで落語を知らないことは不幸なことだと思っていた。しかし、落語などなくても幸せに過ごしているのならば、そちらの方がよっぽど幸福なのではないかとも思えた。

とはいえ、人から「落語、連れて行ってよ」と頼られると、無下にはできなかった。今度こそ、と思った。しかし、もはや三回ぶんのチケットを用意するほどの情熱は残っていなかった。それに、そのころ、私は三人も観せる必要はないとも思い始めていた。

いろいろな人を、いろいろな落語会に連れていった。その中で一人、圧倒的な戦績を誇る落語家がいた。その落語家の会のあと、同行者の目を見ると、ほぼ一〇〇パーセントの確率で喜びの光が宿っていた。感想を聞くまでもなかった。

その落語家は、春風亭一之輔といった。

一之輔は日本大学芸術学部の落語研究会を経て、二〇〇一年に春風亭一朝いつちやうのもとに弟子入りしている。そして二〇一二年、二一人抜きで真打に抜擢ぼつてきされた。

落語家が所属する協会は、大きくわけて二つある。落語協会と落語芸術協会だ。この二団体のいずれかに属している一門の落語家でなければ原則的に寄席には上がれない。

一之輔の師匠筋である春風亭柳朝りゆうちやう一門は、最大派閥の落語協会の方に属している。

師匠は弟子を取ると、そのことを所属する協会に届け出なければならぬ。その順番が、そのまま落語家の序列となる。その並びを香盤かうばんと呼び、自分よりも先に名前がある人はすべて先輩となり、逆は後輩となる。

通常は、その香盤順に「前座↓二ツ目↓真打」と昇進していく。しかし、ごくまれに期待の新人が現れると、協会はその順番を飛び越えて、真打に取り立てる。それを「抜擢真打」と呼ぶ。そして、追い抜いた先輩の数を「二一人抜き」といった風に表すのだ。

二ツ目から真打になるのに、だいたい十年ぐらいかかるものなのだが、一之輔は七年と四カ月に真打になった。

一之輔の抜擢真打を強烈に後押ししたのが、のちの人間国宝で、当時、落語協会の会長を務

めていた柳家小三治だった。傲慢なまでの自負心の持ち主で、人を褒めないことで知られる大御所でもあった。一之輔の師匠である一朝が言う。

「あの人が人を褒めるの、聞いたことがないです。みんなボロクソに言う。寄席で一緒になつてもね、特に同じ一門だと『ダメだ、あんなやり方じゃ』って」

その小三治が、一之輔のことをこのようにべた褒めしたのだ。

「久々の本物だと思った。芸に卑屈なところがない。人を呑んでかかっている。稀有な素質だ。この人を発見して、嬉しかったですよ。この人しか考えられないという気持ちにさせてくれたのが嬉しい。選ばせてくれてありがとう」

以降、一之輔を評するときは、必ずと言っていいほど、このときのセリフが引つ張り出されるようになった。あの小三治をして「久々の本物」と言わしめた落語家だ、と。

ただ、一之輔本人は、ある日の落語会で、十字架のように背負わざるをえなくなったこのときの言葉について、やんわりとだがこう異議を申し立てていた。

「小三治師匠がどういう人か、注釈を入れて欲しいですよ。そう思ってたなら、言わない人ですから。私はなんかの罨わなだと思つてますよ」

私は逆だと思つている。小三治は思ったことを全部、言ってしまう人だった。だから嫌われ

たのだ。

私も一之輔を初めて見たとき、若いのになんとふてぶてしいのだろうと思ったものだ。

乱暴な言い方になるが、初心者が喜びそうな落語家はそれなりにたくさんいる。しかし、長く落語を観続けていると、そういう落語家はやや物足りなく思えてしまう。寄席に出演する数多あまたの落語家の中の一人としては十分に楽しめるのだが、独演会にわざわざ足を運ぶ気にはなれない。未体験者に行くと、付き合いいえ、自分が楽しめそうもない落語家の会に行くのは気が進まなかった。

そこへいくと、一之輔だけは例外だった。私はもちろん、初心者を連れていっても存分に楽しんでくれた。一之輔は、玄人も素人も同時に満足させられる稀有な落語家だったのだ。

落語を初めて聴くのなら一之輔がトリを務めている日の寄席がベストだ。これが私の結論である。

寄席は独演会と違って、いろいろなタイプの落語家を観られるので、それぞれの違いがわかる。そして最後に一之輔が登場したとき、その雰囲気だけで「二人抜き」した落語家はどういうものなのか、あるいは、小三治が「人を呑んでかかっている」と語った意味が一瞬で理解できるはずだ。売れている落語家は例外なく、ただならぬ気配を漂わせている。

また、寄席のトリを張っているときの一之輔は、いつも以上にエネルギーが湧き、楽しそうに見える。寄席とはチームプレーだ。出番順はトリがいかに爆笑を取って終われるかを考えて組まれているし、各演者も最後にトリがやりやすいようなネタを選び、演じ方を工夫する。そうして仲間がつかないでくれたバトンを最後に託されたトリは気持ちが入らないはずがない。

落語の会場では、お目当ての芸人が舞台袖から現れると、客席から「待ってました！」と声がかかることがある。私も心の中で、そう叫ばずにはいられない。開演からそこまで三時間以上、寄席小屋の決して上等とは言えない椅子に座っていると、さすがに尻が痛くなる。それもあって「待ってました」感が半端じゃないのだ。なので、トリのときは演者だけでなく客の方も前のめりになっている。

もう一つ付け加えると、寄席は原則、前売り制ではないため、前もってチケットを入手する煩わしさが無い。週末で、しかも集客力のある演者がトリを務めているときでも、一時間くらい前に並べば入場できないということはほとんどない。

今も印象に深く残っている一之輔の落語がいくつもある。そのうちのひとつが二〇二〇年十一月二十八日、一之輔がトリを務めていた新宿末廣亭の夜の部で聴いた『寝床』だ。

新宿の、土曜日の、夜の部の、トリ。落語家として、これほど腕が鳴る舞台もそうはない。

さらに、その日、新宿末廣亭はしばらくぶりの熱気に包まれていた。一之輔がトリを務めていたということもあるが、理由はそれだけではなかった。

二〇二〇年と言えば、春先から新型コロナウイルスが猛威を振るっていた年だ。寄席も定員を大幅に削減させるなどの条件付きの開催や休業を余儀なくされた。しかし、そのころ、政府は大声での歓声・声援が伴わないイベントの入場制限をいったん解除するという判断を下していた。そんな中で迎えた土曜日、末廣亭は久々に大入り満員の盛況となった。にわかに戻ってきた寄席の賑わいに客も軽い躁状態になっていた。

私は中ほどよりやや後ろのいちばん左の席に座っていた。右隣の若いカップルは、どうやら初めて寄席に来たようだった。終盤になると、一席が終わるごとに女の子が「もう帰ろうよ」と明るく愚痴り、そのたびに男の子が芝居がかった調子で「もう一人だけ！　お願い！」と絶すがるように手を合わせるのがルーティンになっていた。

私は内心、気が気ではなかった。ここまでがんばったのに一之輔を観ていかないでどうするのだ、と。

しかし、そんな心配をよそに、二人は末廣亭のレトロな雰囲気と、初めて体感する摩訶不思議な空間を楽しんでいたようで、なんだかんだ言い合いつつも席を立つことはなかった。

一之輔はよく「客に乗せられた」と話す。客席の雰囲気によつて、落語が「勝手に踊り出す」のだとも。

その日の客は「いい客」だった。変なタイミングで笑う客がいなかったし、みんなでことん落語を楽しもうという前向きな一体感があった。

『寢床』は、義太夫好きな大店の主人おわたなで大家の旦那が主人公の嘶はなしだ。義太夫とは三味線の演奏に合わせ、『仮名手本忠臣蔵』や『義経千本桜』といった話をときに高らかに、ときに地を這うような低音でドラマチックに語る古典芸能のことである。

ある日、旦那はいつものように長屋の住人や店の奉公人を集めて義太夫を披露することにした。しかし、旦那の義太夫は下手の横好きの典型で、とにかくひどい。そのため、声をかけられた人たちは見え透いた嘘うそをつき、不参加を決め込んだ。すると旦那は、ならば「長屋から出ていけ!」「全員クビだ!」とすっかり臍へそを曲げてしまう。さすがにそれはまずいと思った店子たならは協議し、旦那の義太夫に付き合う覚悟を決める。

しかし、すっかり拗すねてしまった旦那の機嫌はそう簡単には直らない。店の番頭がそんな旦那を言葉巧みに操り、翻意させるシーンが一つの見せどころなのだが、一之輔が演じる番頭は従来の人物像とは一味違う。突然、ため口となり、「下手なのは知ってるよ。でも、好きなん

だろ？ だったら、人にどう思われようとやれよ！」と奉公人の立場を超え、直球勝負で旦那を奮い立たせるのだ。

笑えると同時に胸が熱くなった。一之輔は、自分自身に言っているのだと思った。

当時、世界中が経験したことのない規模の新型ウイルスの流行に翻弄されていた。落語界も例外ではない。都内の四つの寄席も一カ月以上の休館を強いられた。歴史上、落語家がそんなに長い間、仕事を奪われたことはなかった。

誰もが右往左往する中、いち早く動いたのが一之輔だった。寄席が休館に入り、そのおよそ二週間後、四月十七日に「一之輔チャンネル」というYouTubeチャンネルを開設し、無料で落語の生配信を行ったのだ。

落語という芸がYouTubeで受け入れられるかどうかは未知数だった。すでに一定の評価を得ている一之輔がトライすることはリスクこそあれ、メリットはほとんどないように思われた。それだけに落語界に衝撃が走った。

〈やりたくてやってるんだけど、やりたくてやってるワケじゃねーんだよな〉

一之輔はツイッター（現在のX）に、そうつぶやいた。個人的な思いと、トップランナーとしての立場。この言葉に一之輔の思いが詰まっているように感じられた。

満席の末廣亭で、私は『寢床』の中の「義太夫」を反射的に「落語」に置き換えて聴いていた。

好きなんだろ。だったら、やれよ――。

一之輔の落語は合間合間に素の本人が現れ、そうした「本音」を滑り込ませる。だからこそ言葉に魂が宿り、さらなる笑いを引き起こすのだ。

その日の一之輔の『寢床』は嵐のようだった。私の心は芝居小屋の中の小さな空間の中で乱高下を繰り返し、終わったときには笑い疲れてぐったりしていた。

一之輔にあつて、他の落語家にはないもの。それは、この爆発力である。

オチを言い、深々と頭を下げると、隣にいた若いカップルは弾けるはじような笑顔を浮かべ、一心不乱に拍手を送っていた。

なんとラッキーな――。

そう思わずにはいられなかった。